

(A) 問題意識

巷に「環境はしばしばそこに棲息する人間によつて変化される。又往々に前者が後者を同化せしむることがある。」といわれる。人がこの世に生れ出た時、その時から環境との同化、離反斗争が始まる。それ故、私達がその人となりを知る上には、彼が身をおく社会情勢を学ぶ必要が生じてくる。逆に当時の社会情勢、世相を学ぶことによつて、幾分なりともそこに生きた人々を窮く知ることが出来るように思える。それだけに、より複雑な世相の中を生き抜いてきた人を学ぶことは、当時の社会情勢を知る上に大いに意義のあることであり、彼の生き方はこれからの私達のある処世術として、一つの道標ともなつてくれる。私が河上肇を研究しようと思ひたつた動機も以上のような考え方に負つてゐる。

(B) 研究範囲

博士が活躍した大正、昭和初期は丁度日本帝国主義がファツシヨ化し、言論に統制・圧迫が加わつてきた時である。

「貧乏物語」に見られるように、大正初期には未だブルジョア経済学者の域を出なかつた博士が、大正八年から本格的にマルクス経済学を学び始め、弟子梅田民蔵の批判を始め、あらゆる批判、論争等に忍従し、又反駁しながら、博士はマルクス主義経済学者としての自己を形成していくのである。この過程にあつて、国家の博士に対する干渉、圧迫も激しかったが、逆に正直一徹な博士をして、益々マルクス経済学の正しさへの確信を深めさせるに至つたようである。

博士の学者としての生涯を考える時、それは博士が市ヶ谷刑務所でマルクス主義学者としての仕事を卒える「没落宣言」をした時につたと考えることが出来る。

私もあまりにも広範に亘つての研究成果を残された博士の足跡を学ぶに當つて、博士没落宣言までを一応の研究目安としたい。こゝでは博士が未だマルクス経済学者に到達する前のブルジョア経済学者としての博士の性格の究明とその時代的背景について述べてみたい。

I 「貧乏物語」以前の博士

「博士はいわゆる進歩的な学者の一人としてマルクスズムを受容したのではなく、いわば伝統的な求道者の一人としてその求道の編路のはてにマルクスズムを「道」として把握した」。即ち、博士にはマルクス経済学者としての生活以前に「道」||モラルを求めると倫理的思想家としての生活があつた。経世家的志士の態度から脱却してバイブルに唱う自らを捨て、他人の為に尽くすという考えに促されたのである。つまり利己主義から利他主義への心の推移である。この利他主義||絶対的非利己主義に遭遇した時、博士の一つの試練ともいへべき転機があつた。そしてその試練を経てきた時に、今までの盲目的な絶対的非利己主義、即ち極端な異常とも云える自我滅却観が、依然自己否定で居るが自らも容認し得る極く平凡な「私心の掃滅」として把握し直されて来た……」

無我苑以後の博士は再び新聞記者になり、明治四十一年京大講師に就任した。彼が志した経済学は明らかに資本主義経済学であつた。それはこれまでの自我滅却から自身を『天下の公器』として、後日世のために役立たしむるには、自己をそれまで保身すべきだとの考え方、いわば『個人的、主観的に自己の利益の為に活動しているつもりだが、その活動は社会的、客観的には世人の必要を満たすが為の活動になる』という考え方に促えられていた。

こうした言葉の中に、イギリス流の自由放任主義を汲み取ることが出来る。

その後博士は助教、欧州留学、法学博士、教授と順調に階段を上り、やがて大正五年博士の名声を高めた「貧乏物語」を大阪朝日新聞に連載し始めた。第一次大戦の真最中のことであつた。当時、彼が取り上げた貧乏問題は、日本国民にとつて、漸く切実な問題として意識されはじめていた。世界大戦の余波は戦争成金を生み出すと共に、インフレによる膨大な貧民層の形成をもたらしつつあつたからである。日本資本主義の躍進に伴なうその矛盾の激化は、国民の目に判然と映つてきた。このような時、博士は資本主義社会の基本問題として、貧乏問題を取り上げたのである。

「貧乏物語」の底流に横たわるものは、相も変らぬ教的な人道主義の倫理学の流れであり、古田光氏によれば『貧乏の経済学を、スミス流の自由主義の経済学よりも、むしろラスキン流の人道主義の経済学に近いものとして主張している』のである。

人道主義に立脚している「貧乏物語」は、資本主義的な考えに基づきながらも、貧乏から派生する種々の社会政策問題に当面する時、博士の頭の中には社会主義経済学が目覚ましてきたといえる。丁度この時、梅田民蔵の痛烈な批判が博士をしてはつきり社会主義経済学への道を踏み出させるに至つたのである。

〔参考書〕

- | | | | |
|-----------------|-------|--------------------|-------|
| 河上肇著「自叙伝」全五冊 | 岩波書店 | 古田光著「河上肇」 | 東大出版 |
| 河上肇著「獄中日記」 | 世界評論社 | 住谷悦治著「河上肇」 | 吉川弘文館 |
| 河上肇著「貧乏物語」 | 岩波文庫 | M・ウエーバー著「職業としての政治」 | 平凡社 |
| 河上肇著「経済学大綱」(出)改 | 造社 | 天野敬太郎編「河上肇博士文獻」 | 日本評論社 |